

## 備忘録「コロナとわたしと日本人」(2)

前おき (8月1日記す)

本稿の第一回を掲載したのは7月29日である。それからわずか4日しか経っていない。しかし、その間にコロナは拡大を続けている。時間がない。今回は異例だが、ほぼドラフトの段階で本稿を掲載する。

できれば読者の皆さんも、本稿の趣旨を多くの人と共有していただければ幸いである。コロナが収束した後になって、「自分の意見は“過剰反応”に過ぎなかった」と、安堵する時が来ることを祈るばかりである。

### 1 潮目は変わった (8月1日記す)

①第一回の原稿を書いたとき、東京都の一日の感染者は290人だった(7月18日現在)。そのときは、まさか二週間後に463人(7月31日)、翌日には過去最高の472人になるとは予想しなかった(8月1日)。

急速に状況は悪化した。わたしは完全に甘かった。やはり心のどこかで「やれ三密対策だ、社会的距離を取れ、業界のガイドラインを守れ」などの対策を、少しは信じていたのだろう。

②感染者数が激増し、状況は激変した。

「今週中になって潮目が変わった。第二波になっている。世界的には第一波の真最中。

燃え盛っている。50歳以上の中高年齢層が重症化しやすい」(濱田篤郎教授7月31日談)。

③しかし、政府も(一部の)専門家も、「基本的な予防策を講じれば感染拡大を防止できる」ようなメッセージを未だに発している。

「東京都新規感染者463人」のニュースを聞いても、西村大臣は「個人は予防策を、事業者はガイドラインを守るのが大事」と繰り返した。

④ある感染症の専門家は「会食での感染が増えている」というニュースに、「会食はいいが、会話する時はマスクをしてほしい」などとコメントをした。親しいものが久方ぶりに集まって盛り上がっているときに、「マスクをして話せ」などといって守られるわけもない。それが人間である。

⑤この方は今までなかなか良いコメントをしていたので、わたしも時おり参考にしていた。し

かし、このコメントには本当にガッカリ。論理を旨とする専門家が、情に流されてどうするか。むしろ「会食の危険性」を訴えるべきだろう。専門家も、日本流の「空気」に感染して同調という病に害されている。日本的思考の欠点である。空恐ろしい。

## 2 今までの感染防止策は失敗した（7月31日記す）

①政府は従来個人向けと業界向けの二方面の対策で、感染の拡大防止を図ってきた。

（1）個人の予防策：三密の防止、手洗いの奨励、マスクの装着、社会的距離の保持、検温など（以下、「予防策」）。

（2）業界の予防策：業界ごとのガイドラインの徹底。

②しかし、7月中/下旬以降の感染の拡大は予想以上に早く、今までの予防策やガイドラインを守るだけでははっきりした効果がない。そこで政府/東京都は、従来の予防策を拡大・強化して、何とか感染防止を図ろうとしている。しかし、営業時間の制限を試みても、優良店舗にシールを貼っても、涙金を補助しても、従来の延長上の策でしかない。弥縫策でしかない。事態はとつくに先を行ってしまった。

大臣が何と言いつくろうと、専門家がデータをあれこれ解説しようと、今までの対策で拡大は阻止できていないし、これからもできないだろう。

③前回のメモでわたしは感染防止・経済再開の「両立アプローチ」の代案として、「小規模の経済再開→小規模の感染増加→小規模の外出制限/交通制限」を繰り返す案を考えていた（第一回10ページ6④参照）。これは、ドイツやイギリスの局地的感染拡大の対策をヒントにしたものである。しかし、東京都の新規感染者が500人に迫り、首都圏でも軒並み感染が拡大しているとあっては、「局地的感染拡大」の域を超えてしまっている。もはや小規模の外出制限/交通封鎖では間に合わない。

④もう少しゆっくり検討したいが、とりあえず首都圏で地域、業種、期間を限定して、即刻しかし徹底的な外出制限/営業制限/交通制限を実施することが緊急である。

同時に（1）特措法を改正し、（2）「経済再開」の方針の再検討し、（3）大規模の外出規制/営業自粛/交通規制を検討し、（4）非常事態宣言の再発表などを検討するなど、課題は山積である。政府が議論を重ねているうちに、またコロナに先を越されそうである。

⑤過去の例を見ても、外出制限/交通制限（またはこれらを含む方法-例えば都市封鎖）が、コロ

ナの急増を止める最も有効な方法である。ざっくりとした大ナタを振るう。もうそれしかないだろう。問題は危機の構造を理解し、果敢に対策を実行できる政治家がいるかである。

残念だが、わたしは極めて悲観的である。コロナ対策の近未来は決して明るくはない。今度ばかりは、国民は徹底的に政府を監視し、批判しなければならない。ひと事ではない。わたし事である。

### 3 医療・家庭・職場の崩壊が始まる（7月31日記す）

①「若者の感染者が増大しても、当面、社会生活には大きな影響はない」。これが政府の考えのようである。もっとも、政府の広報が貧弱で、何を考えているのかよく分らないが……。実に短絡的な物の見方である。

②若者の感染者が増大すれば、その影響はさまざまなルートで広がり、医療現場も家庭も職場も疲弊する。それはやがて、日常生活/社会生活の崩壊につながる。

ルート1: 若者の感染者拡大→50代以上に拡大→重症患者増大→医療崩壊。

ルート2: 若者の感染者拡大→家庭内感染の増大→家庭の疲弊/崩壊。

ルート3: 若者の感染者拡大→職場での感染者増大→職場の閉鎖/破綻。

③仮に1人の若者が感染すれば、その両親、祖父母、親類、濃厚接触者、職場の同僚、友達、近所の人、親類など多くの人に感染の可能性が出てくる。

患者本人にとっても大変な負担である。仕事にも行けないし、医療費もかさむ。PTSD、鬱、その他の後遺症にかかったら何か月も苦しむことになる。下手をすると勤め先をクビになる。

また、家庭内感染が広がれば大変である。父母、兄弟姉妹、祖父母へ感染したらどうなるか。家族が感染したら悲惨である。家族は疲弊する。死者でも出れば、家庭は崩壊する。

④「経済を回す」といっても、従業員が倒れたら職場も回っていかない。クラスターが発生したら職場は閉鎖せざるを得ない。長い目で見れば、感染の拡大を止められない今のやり方では、すぐに行き詰るのが明らかである。感染が拡大すれば、経済再開はない。景気回復はない。V字回復など夢物語である。

⑤感染が拡大すれば、家庭も、職場も、社会も疲弊していく。しかもトンネルはどこまで続くかわからない。家庭が疲弊し、職場も回らず、やがて社会は混乱へ向かう。感染拡大を放置してはならない。一刻も早く抜本策を講じないと、都市封鎖が現実味を帯びてくる。

#### 4 政権は機能不全を起こしている（8月1日記す）

①ここでわたしの疑問は「これは単に個別の対策の失敗なのか」という疑問である。

それとも「有効な対策を示すことができないのは、政権が機能不全を起こしているのではないか」という疑いである。政権の体質の問題である。

②わたしは小市民的で非政治的な人間である。政治家の知り合いもない。しかし、安倍首相のコロナ対応は明らかにおかしい。そういえば首相は1ヵ月以上もきちんとした記者会見をしていない。トップの姿が見えない。国難に対処するにあたって、トップの方針が不明とはあるまじき事態である。

③仕事で交渉に臨むとき、わたしは名刺交換の段階から、相手の挙措動作を微細に観察する。そうして相手の出方や人となりを読む。プロの目で改めて首相を観察すると、思いあたることもある。そういえば昨年秋ごろからだっただろうか。テレビに映る安倍首相の表情がさえない。身だしや挙措動作も以前とは微妙に違う。わたしは、首相は政権を運営する気力/モチベーションを失っているとみる。それが心身の問題か、燃え尽き症候群か、積年の疲労か、何が原因か知らない。

④コロナ禍は国難である。危機の最中にトップを変えるのは愚策だと言われている。普通はそうだろう。だが、専門家の話では、「コロナ禍は野球でいえば2回の表くらい」だという。それなら収束するまでに数年はかかるだろう。もし首相が気力/モチベーションを失っているなら、速やかに後継にバトンを渡すべきである

⑤事は国民の生命と身体に直接関わる。致命的失策を犯す前に変わるほうが、国民のためである。首相の任期は来年の秋までだが、その前に退陣する可能性はあえていえば、30%。コロナはそんなに甘くない。政界の常識とは異なるだろうが、これがわたしの予想である。勿論、当たるも八卦、当たらぬも八卦だが。

⑥新しい政府は野党の協力を得て、コロナと災害対策を主な課題とする一種の「救国内閣」を立ち上げる。そして地方の若手政治家、感染症の専門家、幅広い民間人、社会活動家、実務派の学者の協力を仰ぐ。

とはいえ、政治家たちは、コロナ禍をそこまで深刻にはとらえてはいまい。経済はV字回復だとか、L字回復だとか、解散風を吹かしたり消したり。そんな政治家にとって「救国内閣」など素

人の夢物語である。しかし、危機管理の要諦は「最悪に備え、楽観的に振る舞う」こと。「最悪の事態」を想像する感性がなければ、コロナ対策は失敗に終わる。その結果は悲劇的である。

⑥わたしは、コロナ対策の失敗で、世界の強権政治家の何人かは失脚するだろうと予想している。フラグメンツ第2回6より該当部分を引用する。

自然（＝コロナ）相手には、言葉によるごまかしも、利益誘導も、恫喝も効かない。必要な資質はリーダーの知力（＝理解力、洞察力、判断力、そして器量）である。これを欠く強権政治家たちに、適切な対策が取れるはずがない。彼らの何人かはそれほど遠くない時期に、石をもて追われるだろう。数年後、どれだけの強権政治家が安泰か、それとも失脚しているか。是非見届けたいものである。